

## お茶の水女子大学を離れるの辞

式 正 英

いよいよ長年お世話になったお茶の水女子大学を辞める時が来た。何事にも終わりがあるのだと自らに言い聞かせている程未練が充分にある。それにしても先輩、同僚の先生方を始め、卒業生、学生、関係の皆様には何かにつけて御迷惑をかけたたり御恩顧をこうむったり、お礼の仕様もない位である。ここで誌面を借り皆様に深く感謝申し上げる次第である。

よく在る話しだが、小学生の頃将来何になるかを問われて、一人づつ答える羽目になった。大臣、大将、運転手、車掌、会社社長が御多聞に洩れずマジョリティーを占めたが、私はか細く「技師」と答えた。普段から聞かされていた母の願望のせいだったと思う。技師の何たるかは判らぬままに、おぼろげに独創性のある可能性の高い有用な職種だとは感じていた。時代が下って戦後の混乱の中で選んだ大学の専攻は理学部の地理であったが、地理調査所に勤務してからの建設技官の肩書には、内実はともかく子供の頃の思いが実って結構満足していた。その後経済審議庁に出向したため総理府技官となった。役所での仕事も専門を生かせる内容、例えば地形分類の調査方法を立案したり、フィールドでその調査のテストをしたりと言った類いだったので、それなりに恵まれていたと言えよう。しかし数年も経つ内に仕事を積み上げて効果の程が明らかでなく、役所の成果にはなっても個人の努力は埋没してしまう所謂世の中の仕組みに対し違和感を感ずる様になって来た。そうした折に渡辺光先生からお誘いがありすぐに決心してお茶大に赴任した。

人を相手にする教育の場では反応がはっきり現れるのでやり甲斐がある。教えることを自分としても決して得手とは思っていないが、役所でオフィスに坐っているよりはずっとフィットしたし、とても有りがたい職場であった。もとより大学は研究と教育の場であり、その点でも私にとっては理想に近いものであった。研究環境として、より整備される願望は誰にもあろうから、若い頃はよく不足を嘆き不満を託ったものだが、大学の実際の内容は他とは比較できない程優れた面のあることが次第に判って来た。多分それは物質的な充足と言うのではなく、優秀な人材が多数集まっているからであろう。更に小規模のメリットもあるだろう。よく研究環境を云々する場合は物資や予算をあげつらうばかりで人材にまでは至らない。大事なのは良いグループ、良い組織に基本があると言ってよかろう。大規模ばかりが社会を向上させるものでない事を東欧諸国の次々の独立で最近まのあたりにしたばかりである。お茶大はそうした意味で優れた人達のつくる類い稀な位の良い組織と言ってよい。その中で33年弱の月日を過ごさせて頂いたのだから本当にあり難い事だし、それ以外の人生を置き換えて見ても詮ないことである。

やりたいままで完成しなかった研究課題は幾らでもある。いや総てが中途半端で申し訳無いときえ思っている。研究内容が末広がって理解して頂き難いむきの為に少し説明をして置こう。始めは山好きがきっかけで「日本アルプスの氷河地形」をテーマにした。このテーマに関しては戦後の一番乗りのつもりでいる。氷食地形が主であったがアウトウォッシュなど対比できる堆積地形に次第に興味に移り、更に堆積段丘をも対象に含めた。1972年から1973年の丸一年の在外研究は私にとっては大収穫だった。ババリア・アルプスを調査して日本のものと相似の地形を見出し、こうした問題は私の中で一応の決着を見ている。この時はスウェーデン、カナダ北極にも行けたので新旧の氷河地形や氷河そのものも十分

堪能できた。氷河地形は外的地形営力の中では極端な種類であり、却って他の営力を考える場合基準となるし、気候変化や環境の変動にも重要な指標となる。従って今以て関心を捨てることが出来ない。

地形分類は1951年以来携わっているが、国土調査法による地形調査作業規程の原案は私の草稿が基になっている。また多摩川流域で作成した地形分類図で斜面形による分類を初めて提起した。後者はその後林野土壤調査のベースに採り入れられたりしているし、前者は各種地形分類図の発展に繋がったと思っている。また国土調査の5万分の1地形分類図数葉と都市地盤調査に関連した2万5千分の1微地形分類図十数地域を自ら作成する機会が与えられ、多くの地形事例を経験する事が出来た。

1965年お茶大文教育学部に修士講座制が発足してから私自身は地誌学講座に所属して来た。講義は集落地理学、地形学、地図学、外国地誌、日本地誌、写真地理学、地学など守備範囲は極めて広がった。必ずしも得意でない分野も含まれたが担当している内にいずれも好きになれた。地理学そのものの研究対象が無際限なので、自分の地理学を打ち立てる為にもなるべく接触する分野を拡げて置く方が良いと考えている。数年前から講座の基幹講義にする意味で地誌学を開講した。地誌の方法論やその発達史を述べるつもりであったが、定本がないだけに内容を充実するにはかなり準備が必要であり自分の為にはなっている。地誌を地理学の展開、応用と位置付けるなら、この課題はより真剣に扱われて良い。

お茶大に長く在籍させて戴いたお蔭で色々な局面に活躍させて貰えた。学部や評議会や各種委員会や高等学校など教室の枠を越えた場所での活動の時間が多かった。いずれも自身の体験としては貴重なものであったが、その分教室に御迷惑が掛かっていたとすれば、申し訳ないことでありお詫びを申し上げる。それにしても学生の皆さんと旅を共にした毎年の地理学巡検はいずれも素晴らしい思い出となった。企画した私の方もいつも異った場所にお連れするよう心掛けていた。

エクスカーションに巡検の訳語を当てはめた経緯は定かではないが、大学のカリキュラムや学会行事の用語として旨く定着している。巡検を成功させる基礎は何と言ってもその計画を立てる段階にある。指導に当たる教官の経験と蘊蓄とがこの場面で発揮されるのは勿論だが、毎年異なった地域を選定するにはかなりの準備に加えて開拓精神が必要である。未知の場所への憧れが地理の探究を促して来たのだから、巡検を企てる者は自らも新鮮になれる場所を選ばねばと心に念じてきた。参加した学生諸君にこうした真意がどの程度伝わっていたかは不明だが、巡検の度に私自身も啓発されることが多かった。

奄美大島や徳之島、下北半島、三方五湖、佐渡島、上高地、白馬村、砺波など遠近様々の巡検で訪れた思い出の地は実に多くなったが、旅の日々に織り合わされたその土地の風土がとても懐かしい。こうした思い出を若し共有できているとすれば、それだけでも私は大変な幸せ者である。大学を去るに当たり、これまでの充実感に代わる将来が私に残されているとは思っていないが、培って来た自分の流儀を止めることも出来ない。未知の場所を求めて続けるつもりの旅の行く手に何が待ち受けているか、期待と恐れが相半ばし心が弾んでいる。お茶の水女子大学も地理学科もいつまでも健やかでいて支えとなって欲しい。さよなら。

(1991年12月)